

【主題】

玉野備南高等学校における特別支援教育の研究

【副題】

～通級指導を中心に～

【玉野市立玉野備南高等学校】

【教 諭・川 鍋 洋 丈】

1. はじめに

特別支援教育をめぐる国や本市の動向

特別支援教育については、平成 18 年 12 月に国連総会において障害者権利条約が採択されたことから、翌平成 19 年 4 月には「これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする生徒が在籍する全ての学校において実施されるもの(文科省初等中等教育局長通知抜粋)」としている。

以来、平成 24 年 7 月の中央教育審議会初等中等教育分科会報告『共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進』が出され、平成 28 年 6 月には「可能な限り発達障害児が発達障害児でない児童と共に教育を受けられるように配慮しつつ、適切な教育的支援実施・個別的教育支援計画の作成及び個別の指導に関する計画の作成の推進」をねらいとした改正発達障害者支援法が施行されるに至った。

平成 29 年 4 月に「障害のある子供たちの学びの場の柔軟な選択を踏まえ、幼稚園、小・中・高等学校の教育課程との連続性を重視・障害の重度・重複化、多様化への対応と卒業後の自立と社会参加に向けた充実など」をねらいとした『特別支援学校幼稚園部教育要領、小学部・中学部学習指導要領』が公示された。

平成 30 年 4 月にはいよいよ「高校における通級指導」が制度化されることになった。そこで、本県においても、本校を含めた鴨方高等学校、岡山御津高等学校、勝間田高等学校の 4 校に通級指導の導入が決まった。

本校の所在地の玉野市は「玉野の子は玉野で育てる」との教育スローガンを掲げ、市立高等学校 2 校を有する教育環境にあることから、就学前から高等学校卒業までを視野に入れた教育を展開してきた。そのような中で、発達障害等のある子どもたちに対して、市内で切れ目のない自立支援ができるインクルーシブ教育の必要性が高まっていた。そのような背景もあって、本校が通級指導教室の設置を求められるようになったのである。

2. 設置を決めた本校の決意

本校が通級指導教室の設置を導入するに当たり、本校の教職員でその意義を考えてみた。

多様な生徒の中には発達障害やその疑いのみられる特別な支援を必要とする生徒も一定数在籍している。また入学してくる生徒の中にもその傾向にある生徒が年々増加しているようになってきたことが背景にある。

次の表は、通級指導の導入当時、入学生徒における発達障害の診断の有無についてまとめたものである。ただ、現状では、診断なしであっても診察を受けていない場合も含まれる。

入学年度 入学者数	診断あり	診断なし	合計 (割合)
平成 28 年度 16 人	6 人	0 人	6 人 (38%)
平成 29 年度 22 人	6 人	5 人	11 人 (50%)
平成 30 年度 18 人	3 人	2 人	5 人 (27%)
平成 31 年度 23 人	7 人	3 人	10 人 (43%)

通級指導に求められている、発達障害に起因する学習や日常生活の困り感を軽減していく自立活動は、高校生活全般において必要不可欠な要素となっていくと考えたことが大きな理由であった。

つまりは、特別支援教育の視点を押さえた生徒理解、学習支援や授業のユニバーサルデザイン化といったものは、支援が必要な生徒だけにメリットがあるだけでなく、すべての生徒の「分かる授業」に活かされてゆくと判断したからである。

また、通級指導の実施により、生徒の特性に合った個別最適な学びを教員が考えてゆくことは、教員の指導力向上に資するものである。中でも指導に長けた担当者が身に付けたノウハウを、校内研修を通じて他教員に伝えてゆくことが、困り感を抱えた子どもたちを肯定的に受け入れる学校風土を醸成してゆくものと考え

えたからである。

3. 研究の目的

「高校における通級指導」の有効な実践例と、通級指導を支える要素の一端を明らかにするため。

4. 研究の仮説

- 卒業後の自立的な生活を目指すには、外部機関等と連携したキャリア教育が有効ではないか。
- 通級指導を支える学校風土の醸成には、教育課程に位置付けることと校内研修が有効ではないか。

5. 研究の取組 ～フロンティア的な実践～

個に応じた適切な支援を模索していくうちに、困り感を抱えた生徒の背景要因を探ることが重要であることに気付いた。つまりは、「特性を持った生徒がそうせざるを得ない要因は何か」という障害特性を理解することや、「学習や生活における困難さは何か」という具体的な課題を理解することで支援が始まるということである。

「高校における通級指導」はフロンティア（未開拓な領域）であることから、教科書的な指導書が用意されているわけではない。よって、指導法の開発に当たっては、生徒それぞれの困り感の背景要因を丁寧に探ってゆくしかないというのが実情であり、試行錯誤の連続である。以下、これまでの主な取組を述べる。

ちなみに、令和5年7月現在、本校生徒44名のうち、2年次生4名、3年次生6名の計10名が通級指導を受けている。

(1)教育課程に位置付けた学校設定科目の例

教育課程に、2、3年生で自立活動実施にともなう学校設定科目「キャリア基礎」2単位を設定し、2年生の「簿記」と「情報処理」、3年生の「経済活動と法」と「英語表現」との科目選択ができるように編成した。

科目の履修にあたっては、2月初めに2、3年生全生徒の保護者を対象に案内文書を送付し、2月末に受講希望票を取りまとめた。受講希望票を提出した生徒・保護者と特別支援教育コーディネーター、担任との面談で、通級指導概要の説明を行うとともに、生徒・保護者のニーズを確認し、対象者を決定するようにした。

なお、通級指導担当者は、特別支援教育委員会より1名と、非常勤教員1名が指導を担当している。

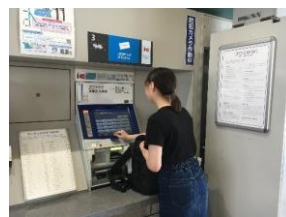
(2)個別最適な学びに向けた指導の例

通級指導の主な内容例を一覧にしたものが次の表である。生徒の個々の特性や進路ニーズによって、個別に対応を考え、個別最適な学びへ近づける努力は常に求められているところである。

1	オリエンテーション	キャリア基礎のガイダンス
2	「得意なこと苦手なこと」アンケート	自己理解
3	コグニティブトレーニング	読み書き計算等の力を育成
4	買い物に必要な計算を体験する	環境の把握
5	JRに乗り公共交通機関利用を体験する	環境の把握
6	人の気持ちを考える	人間関係形成
7	自分の進路について考え、調べる	環境の把握
8	自分の取扱説明書を作る	自己理解 コミュニケーション
9	原動機付自転車免許取得	読解力
10	就職面接対策	自己理解



(レジで会計する体験)



(券売機で切符を買う体験)

日常生活の困り感を軽減してゆくことを求められることもあれば、就職や進学といった進路選択に関する相談についても、その解決策が求められている。

(3)持続的な就労を目指した進路指導の例

卒業生全体で3ヶ月以内の早期離職が懸念されている。令和3年度卒業生のうちほぼ半数が早期離職していた。中に通級指導をしていた生徒2名もいた。就職先に退職するようになった折の様子を聞けば、ほとんどの場合、コミュニケーションの不足や職場で新たな人間関係が築けなかったことが原因になっていたようであった。

そこで、学校全体で令和4年度からはインターンシップを2年生から行い、3年生の応募前職場見学も複数回実施することとした。

また、2月から3月にかけて内定先企業との連絡会を新たに開催し、内定をいただいた3年生が企業担当者から入社前の心構えや入社当初の業務を聞いたりすることで4月からの見通しを持たせようとした。あわせて、採用担当者と複数回会うことで相談できる人間関係を築くきっかけにしようとした。

通級指導対象生徒には、外部の就労支援コーディネーターを招き、企業担当者が加わった就労移行支援会議を開催した。通級指導対象生徒の得意な分野や困り感を把握した上で、どのようなことができるかを検討した。事業所の採用担当者とは数度にわたり懇談を行い、丁寧に説明して理解を得るようにした。

(4)通級指導を支える教員研修の例

本校では、月1回を目安に担任会を実施し、全生徒の授業や生活の様子について情報を共有している。

そこで、困り感を持った生徒への授業指導、進路指導、生活指導など全般にわたって方向性を考えている。

授業指導については、本時のねらいや授業の流れを全時間で示すというユニバーサルデザインの考えに基づく授業の実践に努めている。以前は年2回の公開授業を実施してきたが、現在では教員相互にいつでも参観できる環境にあり、転勤で赴任した教員にとって自らの授業づくりのヒントになっている。

また年2回程度、通級指導担当者が講師となって行う校内教員研修「特別支援教育セミナー」は、通級の指導や外部研修の内容を理解する場となっており、勤務歴の浅い教員にとって、指導法や教材づくりを参考する機会となっている。



(校内研修「聞くトレーニング」体験)

6. 研究の検証 ～成果と課題～

(1)「キャリア基礎」からの検証

学校設定科目の「キャリア基礎」として週時程内に位置付けたことで、本校が「通級指導をしている高校」

ということを外に広めた効果は大きい。2学年合わせて4単位ではあるが、その授業の取組が他教科にも波及し、漢字にルビを振ったり、既習内容を繰り返すドリル式のプリントを用意したりユニバーサルデザインの考え方のある授業が見られるようになった。

また、映像視覚から生徒の理解がより進むことから、GIGA スクール構想一人1台端末の導入と相まって、本校のICT活用は飛躍的に向上した。

このことで、総体的に本校の授業力が高まったと考えられ、学校評価アンケートの結果から見ても、生徒や保護者の満足度は高い。

内容が分かりやすく興味の持てる授業が多い	R 4	R 3
保護者の回答 (よく当てはまる→「4」)	3.4	3.1
生徒の回答 (よく当てはまる→「4」)	3.1	3.1
授業は板書がまとめやすく、画像を見せてくれる	R 4	R 3
保護者の回答 (よく当てはまる→「4」)	3.4	3.5
生徒の回答 (よく当てはまる→「4」)	3.4	3.4

通級指導を受けている生徒だけにアンケート(白髭2023)を実施したが、ほぼ全員が「通級指導を受けてとても良かった」と肯定的に回答している。

さらに言えば、受験のため事前見学に来校する市内外の中学校関係者や保護者から本校を志望する理由を聞けば、「しっかり面倒をみってくれる学校だから」ということであった。

令和5年度の後援会総会(P T A組織に相当)において、発達障害をはじめ感情が高ぶる生徒や集団になかなかなじめない生徒が落ち着きを取り戻す場所として、「さざなみルーム」の整備案が承認された。このことも、本校の通級指導が保護者に認知された結果と言える。現在、「さざなみルーム」の整備計画(川鍋2023)は、先進校の好事例や通級受講生徒から要望を聞き入れながら進められている。

(2)個別最適な学びからの検証

J Rやバスといった公共交通機関を使ったり、街のデパートで会計したりする実地体験は、学校では想定していなかった課題が発見できることもある。このことで、当該生徒の困り感によりいっそう寄り添う支援も可能になってくるはずである。

これまでに様々な個別の支援を行ってきたが、中でも特筆すべきは通級指導を2年間受けていた生徒が、総合型選抜入試で大学に進学したことが挙げられる。

発達障害の診断があるこの生徒は、1年次には集団の中で過ごすことに困り感を抱き、学校トイレの個室にしばしばこもることがあった。担任会で情報共有をした後、HR担任や養護、通級担当者の粘り強い働きかけにより教室内で過ごせるようになった。自分の気持ちを振り返る自分の取扱説明書「トリセツ」を書くことで次第に環境に馴染むことができるようになった。

3年次に大学進学を考えるようになり、外部の優秀な添削指導者との連携により、志望理由や時事問題について自分の思いが自信をもって理路整然と表現できるようになった。入学後に通学できるようにと公共交通機関の乗り方を「キャリア基礎」の中で実際に体験した。現在は一人で元気に通っていると言う。

(3)就職指導からの検証

学校全体で2年生から早期にインターンシップを行ったり、3年生の職場前見学を複数回行ったりしたことで、令和4年度の早期離職者は1名に留まっている。通級指導対象者1名は、離職することなく現在も仕事に頑張っている。それには、作業工程を何度も繰り返し教えたり、雇用形態を最初はアルバイト形式の短時間勤務ではじめ、作業に慣れるようなら正社員に採用するという配慮をしたりするなど、企業側の理解が支えとなっている。

ただ、就職の際には、該当者が障害者手帳を取得しておくことが有効であるが、保護者の中には取得することに抵抗感を持たれることもある。信頼関係を築きながら取得の有効性を説明し、取得に向けた病院診察までを案内する難しさがある。

(4)教員研修からの検証

学校設定科目の「キャリア基礎」を教育課程に位置付けたこと加えて、生徒の特性に応じてきめ細かい指導をしていこうという学校風土が醸成しつつある。

校内研修を通じて、校内の教職員が通級の指導内容を理解したことや授業のユニバーサルデザイン化の具体を知ったことが直接的な要因と考えられる。

このことは、教職員が考えを出し合って作った本校学校グランドデザイン(次の図)に見て取れる。他者を思いやる「人間力」を基盤にし、持続的な就労と安定した生活を営むために、「基礎的な学力」「コミュニケーション力」「自己管理能力」の3つの力を育成するというものである。

「生徒一人一人能力・特性・環境に応じた多様な進路実現と人間力の育成を目指す学校」は学校経営目標(白髭2023)にも反映される結果となった。



本校の高校における通級指導のノウハウは、県教委特別支援教育課の研修講座やサポート校支援制度等で校内に留まることなく、県内や市内に広がりを見せている。中でも県の研修講座講師(川鍋2022)を務めたことから、地元玉野市内中学校の7校の通級指導担当者と子どもの様子や指導を巡る困り感を平素から相談し合う連携が進んだことは、大きな意義があったと言える。

7. おわりに

小中学校生活の経験が少ない(不登校)生徒が多く入学する本校は、地元中学校から「最後の砦」と言われている。特性のある生徒が受講する通級指導では、生徒本人・保護者の願いを捉えて、様々なことが指導できる体制づくりが必要である。本校では現在の高校生活場面で満足するのではなく、卒業後の社会的自立や社会参加をするために必要なスキルや、生徒本人の自己肯定感の向上につながる内容を実施することが重要であると考えている。

今後も、本校の通級指導は実社会で必要な自律スキルを身につけ、将来自立した生活を送ることができるための指導を目指していきたい。